

『ユアトーン』 中村仁彦



令和2年5月 柘書房刊

下咽頭癌の除去手術で声を失って五年が経過した。辛い再発はない。歌集を出したのは手術後三年目。歌の整理や選歌などの準備に一年以上かかったので、十四キロやせた体力の消耗具合を考えると驚異的なスピードだった。突然の大病と死ぬかもしれないという恐怖が私を急き立てたとは思えない。

ユアトーンは喉の震えを拡声してくれる小さなデバイスだ。アヒルのような単調な音しか出ないが、自分の意志を音声として人に伝えることができる。最初は怖かった一人旅もできるようになった。コスモスの歌会も参加できる。また、福岡県歌人会の理事会で自分の意見を言うことができる。聞いている人の迷惑を考えなければ、以前と同じように人と接することが出来ている。

沢山の方からお手紙やお祝いの品を頂いた。一つ一つにお礼の手紙を書きながら、この経験は本当に貴重な財産だと思った。そして秘かな決意、第二歌集だ。大病とは無関係に抒情性のある歌をつくれるように躓いている。

——歌集の著者から——

『こゑのゆくへ』 奈良橋幸子



令和2年5月 六花書林刊

今年も山茶花が咲いた。花の乏しい時節に咲く山茶花にほっとする。白色、薄桃色、紅色の花を、往還に立ち止まり、ただ眺める。そして、ああもう十一月だ、と思う。大切な三人のひとの忌月だ、と思う。

山茶花は伴侶とよく眺めた花である。去年とは異なる新しい花ももうすぐ亡ぶ。亡ぶまで花を眺める日々に、私は思い出すのである。季節の移ろいの中で咲く花に誘われ、なつかしく、死者を思い出すのである。それは過去として回想するというより、死者と語らうと言った方がふさわしい。語らいながら、自分を確かにしてゆくものを、自らが見い出す静謐な時間であることを知り、慰藉の時間であることを知る。

山茶花の冬が終り、春浅い頃、三楹の花が咲くと、夏の水辺に、小さな白い沢瀉の花が咲くと、私はその花を歌った二人のひとをまたなつかしく思い出すだろう。

『こゑのゆくへ』以後も私は花を歌い、季節を歌う。どれほど歌っても歌い尽くすことはない、と思う。

『オストメイトの闘ひ』 井上武司



令和2年5月 現代短歌社刊

今度の歌集『オストメイトの闘ひ』は、第一歌集『蹠と鬱のバラード』に続く第二歌集で、「オストメイト」とは腹部に造設した人工肛門（膀胱）保有者のことで、私の場合は大腸癌手術後の処置で一年後に元に戻す事が出来た。当歌集は幸いにも埼玉県教育委員会主催の埼玉文芸賞の次賞（短歌部門）を戴きました。今回は正賞受賞が無く、他結社の元教師の女性と次賞は二名でした。前年度はコスモス埼玉支部のT氏が正賞で、賞金額は次賞よりも二十万円多く三倍でした。作品、実力の差が金額の差として位置づけられました。

思わぬ入金が嬉しくて、さっそく一部を「コスモス基金」に協力させて頂きました。表彰式は桶川市内のさいたま文学館で、小説、詩、俳句、児童文学等他部門の受賞者と合同実施の予定でしたが、コロナの感染防止対策で中止となりました。私と同時受賞された女性の住所を調べて、お互いの受賞歌集の交換は出来ました。

——歌集の著者から——

『音惑星』 矢沢靖江



令和2年6月 本阿弥書店刊

美しいものを詩的に表現する歌に魅かれて短歌を作るようになり、歌いためたものが第一歌集になった。

出版後は、もっと斬新な視点、工夫のある表現、的確な比喩を備え持った歌を詠みたいと思うようになったが、同時に、手触りのある歌を作りたいと思った。感動の芯があつてこそ歌が生まれるように、歌を作る前に、まず生きるという実体があるのだと思う。歌を作る日々は、生きていくなかで様々に出会うものから湧き上がる感情を掬い取ろうと挑戦した日々であった。倭万智さんが歌集評のなかで「人生への愛惜に満ちた歌集だ。過ぎ去った時間を惜しむのは、せつないことである。けれど、いっぽうでそれは、惜しむに値する時間を持った人の特権でもある」と言ってくださったことはとても嬉しく、過分な言葉であるが、心に蔵わせていただいている。

二〇一九年に夫が急逝し、まず挽歌を入れた歌集を先に出すべきと高野先生におっしゃっていたいただき、二〇一四年から二〇一九年の歌を挽歌とともに第二歌集とした。